

# マダガスカル柔道の現状

## －青年海外協力隊短期派遣活動からの考察－

宇都宮奈美<sup>\*</sup>，萩裕美子<sup>\*\*</sup>

### Current conditions regarding judo in Madagascar - Discussion based on the short-term activities of a member of the Japan Overseas Cooperation Volunteers -

Nami UTSUNOMIYA<sup>\*</sup>，Yumiko HAGI<sup>\*\*</sup>

#### Abstract

As a member of the Japan Overseas Cooperation Volunteers (a JICA program) assigned to the field of Judo, I engaged in short-term activities for the promotion of Judo in Madagascar for one month from August 1 to September 1, 2006. Activities involved guidance and practice at six dojos (training halls) on a tour basis. Guidance varied depending on the level of the dojo, but focused primarily on the fundamentals such as leg and combination techniques. Environmental differences, such as lack of Judo uniforms and dojos with no tatami mats, were shocking from my perspective as a Japanese person, and enabled me to reaffirm the benefits of the Japanese environment. Despite these environmental shortcomings, there were many dedicated Judo practitioners, and Judo was loved and seen as an integral part of people's lives. This month-long program was highly meaningful as it enabled me to contribute to international exchange through Judo, a sport I have long been dedicated to. I hope for the further development of Judo in Madagascar.

**KEY WORDS** : Judo, international contribution, international exchange, Madagascar, Japan Overseas Cooperation Volunteers

#### 1. はじめに

柔道創始者である嘉納治五郎は早くから柔道の国際化を視野に入れて活動をしていた。

杉山 (2002) は著書で、嘉納師範は「柔道世界連盟の組織は、私の畢生 (ひっせい) の事業」(1933年ロンドンで世界柔道連盟の感想を述べた時の言葉) と語り、度々海外へ渡航し、精力的に普及活動を行った、と著している。<sup>1)</sup>

現在も日本柔道界では継続的に指導者を海外に派遣し、柔道の発展、国際普及に貢献している。そして現在では、国際柔道連盟加盟国数は199ヶ

国となり<sup>2)</sup>、柔道は国際的競技になったといえる。

今回筆者はその国際普及の一環ともいえる、JICA による青年海外協力隊短期派遣隊員のメンバーとして、マダガスカルにて活動を行った。現地ですでに隊員をしている東出佳代氏からの要請によって募集が出され、メンバーを選出、2006年8月1日から9月1日まで、マダガスカルにて柔道の普及、発展の活動に参加した。

本稿では、マダガスカルについてとマダガスカルでの柔道の歴史について触れながら、今回の活動報告について述べる。

---

<sup>\*</sup> 鹿屋体育大学大学院体育学研究科

<sup>\*\*</sup> 鹿屋体育大学スポーツライフスタイル・マネジメント系

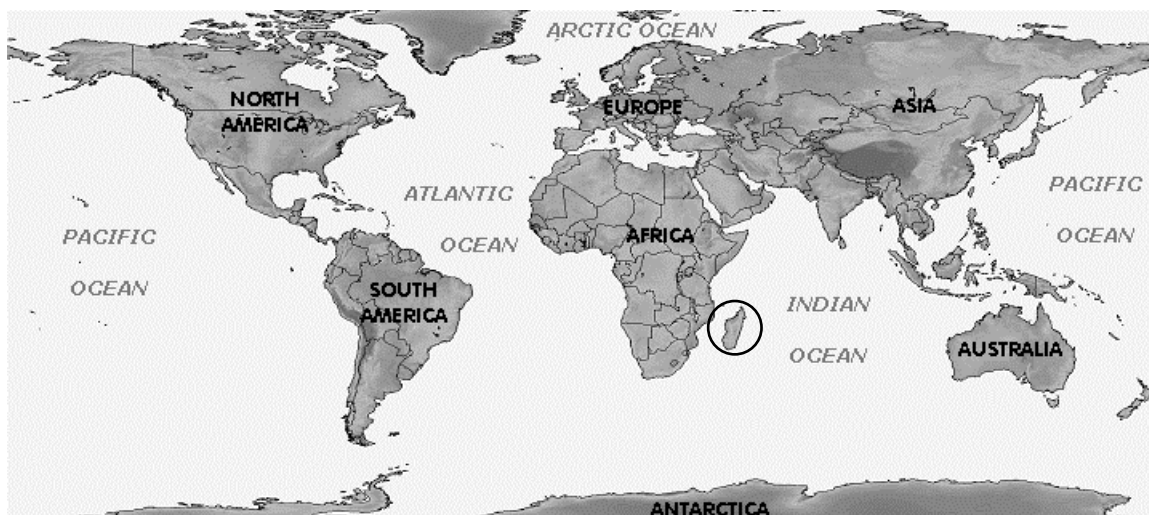


图 1 世界地图

資料出所：World Atlas ホームページより引用。

## 2. マダガスカル共和国について

在マダガスカル大使館（2005）によるとマダガスカル共和国は以下のように要約される。<sup>6)</sup>

(1) 面積

マダガスカルはアフリカ大陸の東海岸に近く、インド洋上に浮かぶ島である。日本の面積（37万km<sup>2</sup>）の約1.6倍（58万7041km<sup>2</sup>）もある。グリーンランド、ニューギニア、ボルネオに次ぎ、世界で4番目に大きい島である。ユーラシア、南北アメリカ、アフリカ、大洋州（オーストラリア、南極）に次ぐ大陸として、「第6の大陸」とも形容される。

また神が地球を創造する際、まず左足を踏み込んだ場所がマダガスカルでの島の形の由来となっているとして、「神の左足」と形容される。

## (2) 人口

外務省によると<sup>8)</sup>、人口は約1910万人である。  
(2006年現在)

### (3) 首都

首都はアンタナナリボ (Antananarivo) で人口は約200万人におよぶ。(2003年現在)

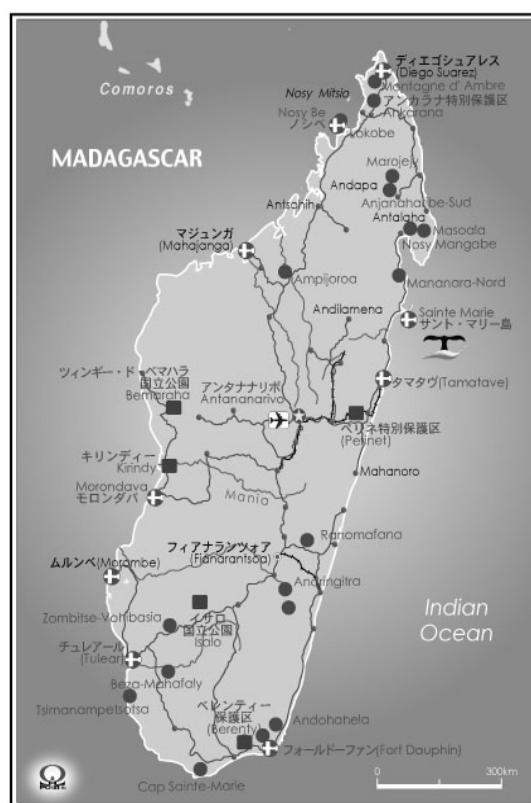


図2 マダガスカル地図

資料出所：世界地図旅行とデザイン地図製作・ホームページ地図作成ホームページ「マダガスカル地図」より引用。

(4) 民族

マダガスカル人の起源は、5世紀頃のインドネシア人に遡ると考えられている。季節風を利用して丸木船によりマダガスカルに渡来。その後アラ

ブ系，アフリカ系種族も到来して18の種族（メリナ，ベチメサラカ，ベチレオ，サカラバ，アンタンドル，その他）が形成された。

この18の種族の中で最大広域部集団はアフリカ本土系のサカラバ族である。この種族の分布はマダガスカル本島の西海岸部沿岸のほぼ全域をカバーしており，当地における文化，習慣に大きな影響を及ぼしている。また経済的には高地族であるインドネシア系統のメリナ族（首都周辺広範囲に分布）が支配的な地位を堅持している。各部族はそれぞれ独自の風俗，習慣，方言を有し，高地族と海岸部の対立に加え，部族相互間の反目等も絶えず，互いの意思疎通の障害となっていることはいふまでもない。

#### （５）言語

マダガスカル語，フランス語が共に公用語である。外務省によると<sup>8)</sup>，2007年4月の憲法改正で英語も公用語となった。

#### （６）宗教

伝統宗教が52%，キリスト教が41%，イスラム教が7%とされている。（2003年現在）

カトリック，プロテスタント，ルーテル教会およびアングリヤンのキリスト教4派が相半ばして根強く住民に浸透しているほか，日常の生活様式には伝統宗教の習慣が同居している。マダガスカル人は概して信仰心があつい。

#### （７）生物

大昔の古生代から中生代の初めにかけ，マダガスカルは現代のインド，アフリカ，オーストラリア，南極大陸，南米が一体となって広がっていた古い大陸である。新生代に入ってこの大陸が分裂，移動し，現在のような各大陸が形作られた時，マダガスカルもアフリカ大陸と分離し，マダガスカルだけが孤立してしまったため外界との接触を閉ざされ，動植物が独自の進化を遂げた。ライオンや象，キリンなどのアフリカ大陸で見られるよ

うな動物がいない代わりに，ある種のものはさかんに繁殖，種分化したため，マダガスカルの野生生物の70～80%はこの島にしか存在しない固有種であり，動物学や植物学の学者たちの強い関心を集めている。

そのことから，類稀なる謎を秘めた島「異端の楽園」，世界的に稀な動植物が存在する「動植物の宝庫」とも形容される。

### 3. マダガスカル共和国の歴史

地球の歩き方（2001）では，マダガスカルの歴史を以下のように著している。<sup>5)</sup>

2000年前から5世紀まで，東南アジアや太平洋，アラビア半島などから移民がマダガスカルに流入し，おもに高地に定住した。またアラビア商人がアフリカ系の奴隷を連れてきたため，黒人の多くが沿岸部に居住している。

定住した人々は18の主要な集団に分かれたが，その中でも最も勢力を誇っていたのが，インドネシア系のメリナ族で，1974年にアンタナナリヴをメリナ王国の首都と定めた。

16世紀にポルトガル人がマダガスカルを発見後，ヨーロッパからの進出が始まった。1896年，フランスとイギリスの協定により，マダガスカルはフランスの植民地となった。1930年代から独立への気運が高まり，1947年の蜂起では多くの犠牲者が出たが，1958年に自治を勝ち取り，1960年に共和国として独立した。

柔道の歴史としては，この柔道王国であるフランスからの植民地時代に海軍がマダガスカル人に柔道を教えたことがきっかけだったと言われている。

### 4. JICA とは

JICA 公式ホームページでは，JICA を以下のようにまとめている。<sup>7)</sup>

JICA とは独立行政法人国際協力機構（Japan

International Cooperation Agency) のことである。技術協力の実施機関として、開発途上国の社会・経済が自立的・持続的に発展できるよう、国づくりを担う人材の育成を中心に様々な協力活動を実施している。

具体的には開発途上国の行政官や技術者を日本に招いて研修を行ったり、日本から専門的な技術・知識を持った人を派遣したりするとともに必要な機材を供給し、また国や地域の開発計画を作成するために様々な調査団を派遣している。

特に開発が遅れている地域に関しては、学校、病院などの施設建設や機材供与を行う無償資金協力の調査とその実施促進を行っている。このほか、青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの派遣、大規模災害が発生したときの災害緊急援助、日本国内の国際協力の担い手を育成する人材育成事業などを行っている。

対象分野は、従来から協力を実施していた農業や社会基盤の整備をはじめとし、最近では HIV や SARS などの感染症対策に対する支援、市場経済化や法整備に対する支援、アフガニスタンや東チモールなどに見られる平和構築・復興支援など、国際情勢や開発途上国のニーズの変化に対応し、多岐にわたる協力を展開している。

## 5. マダガスカルにおける JICA サポート

マダガスカルでは私たち柔道隊員の他にもたくさんの方の職種の方が活動をされていた。活動隊員の職種は、村落開発普及員、青少年活動、日本語教師隊員、助産師、看護師、生態調査、木工、稲作、婦人子供服、養護、体育、野菜と様々である。

私たちが活動中に会った村落開発隊普及員の方は、お土産品の開発をしているとのことであった。また野菜隊員の方は農作物の栽培の手伝いをされているそう。マダガスカルのタマネギは小さいので、大きなタマネギの栽培を試みているとのことであった。ほか、生態調査隊員の方はチンバザ動物園に勤務し、日本の動物園との連携

に貢献するなどしており、多くの隊員がマダガスカルで活動に励んでいた。

## 6. マダガスカル共和国と日本の友好関係

外務省は、マダガスカル共和国との関係を以下のようにまとめている。<sup>8)</sup>

日本は1960年に独立を機にマダガスカルを承認した。その後、1968年2月に日本大使館がマダガスカルに開設、1969年にはマダガスカル大使館が東京に開設された。

そして1997年には日本とマダガスカルの援助政策会議が実施され、3年後の2000年10月に青年海外協力隊派遣取極が締結された。その後2002年に青年海外協力隊の派遣が開始、2003年2月に現地事務所が開設され、同年10月24日、日本とマダガスカル間で技術協力協定が締結された。マダガスカルとの技術協力協定は、日本が1970年に初めて同趣旨の協定をブラジルとの間で締結して以来、24件目であり、サブサハラアフリカ諸国のなかでは初めての締結である。

## 7. マダガスカルの柔道の歴史

マダガスカルの柔道は、フランスの植民地時代に、フランスの軍人によって伝わったのが始まりである。しかしながら当時の柔道はあくまでフランス人が主流であり、同じ畳の上にマダガスカル人が上がることは許されなかった。1960年、マダガスカルはフランスから独立を果たす。独立後は、マダガスカル人による町道場が設立され、マダガスカル人にも柔道を始める人が増えてきた。

マダガスカル柔道を支えた日本人指導者は、主に表1に記される。(表1)

表1 マダガスカルにおける主な日本人指導者

1960年	マダガスカル独立。
1970年代	JICA の派遣により大樫哲夫氏が2年間の活動。
1985年	国際交流基金派遣により甲斐光氏が2年間の活動。
1990年代	国際交流基金派遣により野口仁人氏が2年間の活動。
2001年	国際交流基金派遣により甲斐光氏が1年間の活動（2度目）。
2005年	JICA 派遣により東出佳代氏が2年間の活動。
2006年	JICA 派遣により筆者を含めた短期隊員の1ヶ月間の活動。

## 8. マダガスカルの柔道組織と普及活動

マダガスカルに派遣された青年海外協力隊柔道隊員が所属しているのは、マダガスカルの教育省の組織の中にある「JUDO IN SCHOOL」である。これは甲斐氏が作った教育柔道の組織である。マダガスカルの教育省は、柔道の教育的価値を認めており、この機関の全国展開を図っている。大きい道場ではないが、学校の中に併設された施設である。

またマダガスカル柔道の発展に貢献した甲斐氏は、この「JUDO IN SCHOOL」普及の為に帰国後、「NPO 法人インディアンオーシャン支援機構」を設立した。そこでは日本にある古くなった柔道畳や、日本の学校の授業用の柔道衣、古くなってしまった柔道衣を集めて、マダガスカルに送り、マダガスカル柔道を支えている。最終的にはマダガスカルの小学校において、1年生から柔道を正式な必修科目にするべく、活動を続けられている。

またマダガスカルの大学の入学試験には、柔道の科目がある。マダガスカルには柔道学科というもの存在着するのである。しかしながらその試験を実行する人がおらず、指導者がいないため、現在は実施されていない。そのため、その試験実施を実現させることも今後のマダガスカル柔道の課題とされている。

## 9. 短期派遣隊員活動について

### （1）プログラムの概念

青年海外協力隊の派遣の形として、「短期派遣」

というもの存在着する。通常の派遣は2年であるが、短期派遣は1年未満である。今回我々の行った活動もその短期派遣になるのだが、語学研修なし、活動期間約1ヶ月という特殊なものであった。またこのプログラムは現在現地で活動中の東出隊員の要請により生まれ、計画されたものである。短期派遣メンバーは、2006年度7月に書類選考及び面接にて選出、決定した。当初の予定は4名であったが、最終的には6名になり、増員の代わりに隊員活動経験者がプログラムオフィサーとして引率する形となった。

### （2）柔道隊員及びプログラムオフィサー

現地柔道隊員：東出佳代（大阪体育大学卒）

プログラムオフィサー：長谷川拓（元青少年隊員）

短期派遣隊員：奥村啓吾（大阪音楽大学卒）

宇都宮奈美（鹿屋体育大学大学院1年）

喜友名哲子（鹿屋体育大学卒）

黒澤奈緒美（立教大学4年）

下田あずみ（関東学園大学4年）

駒井仁幸（関東学園大学2年）

### （3）日程

活動期間は、2006年8月1日から9月1日までの約1ヶ月間であった。また日程は表2の通りである。

表2 活動日程

		午前	午後
1日	火	成田発 アンタナナリボ着	JICA 事務所にてオリエンテーション
2日	水	マダガスカル外務省, マダガスカル柔道協会表敬	
3日	木	Judo In School 会長表敬	出発準備
4日	金	アンチラベに移動	
5日	土	アンチラベの Judo In School	アンタナナリボ移動
6日	日	休み	
7日	月	ツルヌマンディティに移動	
8日	火	休み	ツルヌマンディティ Judo In School
9日	水	自主練習	ツルヌマンディティの Judo In School
10日	木	休み	ツルヌマンディティの Judo In School
11日	金	アンタナナリボ移動	
12日	土	休み	アンブヒチャマンジャカの Judo In School
13日	日	休み	
14日	月	休み	
15日	火	休み	
16日	水	アンブヒチャマンジャカの Judo In School	ナショナルチーム強化練習
17日	木	アンバシャビットの Judo In School	ナショナルチーム強化練習
18日	金	ウスカの Judo In School	ナショナルチーム強化練習
19日	土	ナショナルチームとの強化練習	アンバシャビットの Judo In School
20日	日	休み	
21日	月	休み	
22日	火	タマタブに移動	
23日	水	タマタブの道場	タマタブの道場
24日	木	タマタブの道場	タマタブの道場
25日	金	タマタブの道場	タマタブの道場
26日	土	タマタブの道場	タマタブの道場
27日	日	アンタナナリボ移動	
28日	月	休み	
29日	火	ナショナルチームで指導 (柔の形指導)	ナショナルチームとの強化練習
30日	水	ウスカの Judo In School	
31日	木	JICA 事務所報告, マダガスカル柔道協会, 日本大使館表敬	
1日	金	アンタナナリボ発 成田着	

## (4) マダガスカル各地の道場について

## ① アンチラベ (Antsirabe) Judo In School (写真5)

アンチラベには首都アンタナナリボから自動車  
で約4時間かけて移動した。

この地はアヴェ・マリア参院長年奉仕活動を行っていた日本人シスターをモデルにした曾野綾子著の小説「時の止まった赤ん坊」で舞台になった土地でもある。日本の援助で医療機器の提供もあり、その点から考えると我々日本人に少し馴染みのある街である。

道場は縦に長いスペースで、40畳ほどであった。隙間が少し目立ったが、持ち運びしやすい軽い畳であった。また稽古には指導者2名を含め、約10名の生徒が参加した。夏休み中ということで、いつもより少ない参加であった。年齢は小学生の高学年程度で、競技レベルは低かった。指導は、寝技の補強等 (脇絞め, エビ, 逆エビ, 足廻し等) を主に行い、技術練習では四つんばいの状態の相手の脇をすくって返すという初歩的なものを指導した。

ここで一番熱心だったのは、指導者2名であり、

今後の発展が期待出来るように感じた。

② チルヌマンディティ (Tsiroanmandidy) Judo In School (写真 6, 7)

チルヌマンディティには首都から自動車で、約 6 時間かけて移動した。この道場は東出氏が活動している地域である。生徒は幼児や小学校低学年クラスが約 10 名、小学校高学年から中学校クラスが約 10 名であった。指導は午後に 3 日間行われ、寝技では下からの引き込み方、立技では大内刈、小内刈などの足技の指導を行った。また幼児が多いので、東出氏の苦勞が目に見えてわかった。

③ アンブヒチャマンジャカ (Ambohitrimanjaka) Judo In School (写真 8, 9)

アンブヒチャマンジャカは自動車、徒歩で首都から約 40 分であった。ここでは約 40 名の生徒が参加した。道場の畳は新しく、広くはなかったが、とても立派な道場であった。柔道着も、全員が立派なものを持っていて、経済的に豊かな人ばかりのように見受けられた。それはビデオ撮影をしている保護者の方や、彼らの服装からも感じ取ることが出来た。柔道のレベルは比較的高かったが、強い日本人とはやりたくないという生徒が多く、それは特に、上級生の女性に見られた。素直に指導を受け止めようとしない生徒もあり、柔道の技術レベルは高かったが、精神性において、さらに稽古に励むべきだと感じた。

稽古内容は特に打ち込みの指導を行い、移動打ち込みで大外刈や大内刈等の指導を行った。

④ ナショナルチーム合同練習 (写真 10, 11, 12)

ナショナルチームの稽古は 4 日間行われた。50 人程度の人間が集まり、競技レベルの高い人たちばかりであった。稽古内容は現地の先生指導の下行い、積極的に乱取り稽古を行った。お互いとても良い勝負で、内容の濃い稽古になった。しかしながらやはり変則的な組み手、変則的な技が多く、引き手と釣り手をきちんと持って投げに行く基本

的なことが出来ていないように思えた。他全員ではないが 20 名ほどに対し、後日、柔の形の指導も行った。

またナショナルチームでの稽古最終日はマダガスカルテレビ局の取材が来るなど、稽古は大いに盛り上がり、隊員の東出氏が熱心なインタビューを受けていた。

⑤ アンパシャビット (Ampasapito) Judo In School (写真 13)

アンパシャビットは徒歩で首都から 15 分くらいの場所にあり、生徒は指導者 3 名を含め、幼児から小学校低学年の生徒 20 名ほどであった。競技レベルはあまり高くなく、癖のついた打ち込みの修正をするのに時間がかかった。ここでは寝技で、四つんばいになった相手の返し方 2 つ (相手の横につき手と足を引き込んで仰向けにする返し、相手の両膝裏に自分のふくらはぎを引っ掛け、後方に返す) を行い、打ち込みの指導を行った。

⑥ ウスカ (USCA) Judo In School (写真 14)

ウスカの道場には首都から車で 20 分ほどで移動した。野球場の片隅にあるのがこの道場で、広さは試合 1 試合場分より少し大きいくらいであった。参加者は小学校低学年から中学校程度までの 50 人ほどで、中にはアンブヒチャマンジャカの生徒も参加していた。また日本人の母をもつ生徒が 1 人おり、他の生徒の通訳がわりになってくれた。ここでは主に立技の指導を行い、大外刈、また大内刈からの大外刈、体落の指導を行った。

⑦ タマタブ (Tamatave) の道場 (写真 15, 16, 17)

タマタブには首都から自動車で、約 11 時間かけて移動した。マダガスカル東部の海岸部に位置する観光地であり、美しい町であった。

海岸部付近のいくつかの道場がひとつの道場に集まり、指導者も含め、約 60 人が集まった。しかしながら大勢集まったものの国内の派閥の問題で、首都から届くはずの量が届かないという問題が起

こり、指導はおがくずの上にシートを敷いて行われた。摩擦で多少の痛みはあるものの、指導や稽古ともに問題はなく、十分な環境であった。

指導は、柔道衣のないグループ、柔道衣のある初心者グループ、上級者グループにわけ、午前午後と行った。

柔道衣のないグループでは、寝技の補強運動や受身などの柔道衣がなくても出来る指導を行った。そして上級者グループでは、主に打ち込みの指導を行った。打ち込みの細かい指導から、移動打ち込み、連絡技の指導を主に行った。全員が熱心で、指導は予定時間をオーバーするほどであった。

また指導後には、指導者グループとの話し合いも設けられた。質問では「強くなるには何を食ったらいいか。」というものから、「強くなるために一番大切な稽古は何か。」というものまであった。また柔道の理念である「精力善用・自他共栄」についても熱心に勉強していた。

さらにこの道場で最も感心したのは、指導者が教育者であったことである。道場の責任者であるジーン氏は、道場に1番に来て掃除した子をみんなの前で褒めたり、遅刻しないようにうながしたりしていた。また「生徒が指導者より遅く来てはならない」ということまで、柔道の技術だけに留まらず、きちんとした教育を行っていた。大抵の道場では、決まった時間に始まることはほとんどないのだが、ここではこのジーン氏のおかげで、指導をスムーズに行うことが出来た。またチームワークも抜群で、最後には円陣を組んでダンスを踊るというユニークな道場であった。

そして彼は、「お金持ちだけでなく、貧しい人ほど柔道をやってほしい。柔道をやることでたくさんのかたを学び、立派な大人になることを願っている。平気で盗みをするような子供たちを見たいられない。」というようなことを述べていた。道場の生徒の中には、知的障害者の子もあり、そこからジーン氏の人間性がうかがえた。

発展途上国においてよく言われることは、「柔道衣が欲しい。」という物的支援の要求である。

しかしながらタマタブの道場に関しては、「柔道衣も畳もいらないから、指導者が欲しい。」という人的支援の要請であった。私はこの道場で教育者である彼に感動し、これこそ真の柔道国際化であると思った。

## 10. 今後のマダガスカル柔道の課題

マダガスカルにおいて柔道は、まだ経済的に豊かな人たちの行う競技であると感じた。特に首都近辺ではその傾向が見受けられた。柔道衣はやはり高価なものようで、どこに行っても柔道衣の主体は、日本から送られるリサイクル柔道衣であった。その中でも「日本大学第一高等学校」のリサイクル柔道衣はどこに行っても使われていた。また手作りの柔道衣、柔道衣よりも生地が薄い空手道衣を着ている者も多く、柔道衣の不足は今後の課題のようである。特に海岸部タマタブでは、柔道衣不足は深刻なようで、その理由として首都からリサイクル柔道衣がきちんと回ってこないこともあるようだった。これには民族間の摩擦等も関係しており、今後のマダガスカル柔道界においての重要な課題であると考えられる。

また、物的支援ではなく、人的支援を求めているタマタブの道場には、積極的に協力し、今後マダガスカル人の指導者を育てていくことも課題であると考えられる。

## 11. おわりに

1ヶ月の活動は、文化の違い、異なる環境、様々な面で大変であった。移動中、タクシーのドアが開いたり、病気や発熱で病院にお世話になったりと、様々なアクシデントにも遭遇した。また畳がない中、柔道衣がない中での稽古は衝撃的であった。

しかしながら遠いマダガスカルという国の柔道家たちに出会えたこと、また共に稽古したことは本当に有意義な時間であった。中でもタマタブの



道場の先生との出会いは感動的であった。そのほかにも熱心だったタマタブの少女ブレンダ，ツルヌマンディティの下宿先で出会い折り紙をしたサラ。忘れられない出会いがたくさんあった。

私たち短期派遣隊員はこの１ヶ月間の活動で，自分が続けてきた柔道を海外に伝えられ国際交流に貢献出来たということ，柔道を愛する気持ちは世界共通だったということ，様々な喜びと大切な気持ちを再確認することが出来た。

また私たち短期派遣隊員は，語学研修を全く行わず，面識も顔合わせもほとんどない状態でメンバーを組み，現地に派遣された。同じ日本の柔道家という繋がりだけで，この活動を行ったのである。怪我や病気に合ったりもしたが，無事に活動を終え，そして成功させることが出来た。これは，柔道で生まれた絆である。短期派遣隊員の誰が欠けてもこの活動を成功させることは出来なかったのではないだろうか。この１ヶ月間で，マダガスカル柔道家たちの出会いはもちろんのこと，この活動をするために集まった短期派遣隊員のメンバーとの出会いにもまた感謝している。この隊員たちに出会えたことで，日本でも柔道が愛されていることが再確認出来，そして柔道を頑張ろうという気持ちがさらに強くなった。

終わりに，マダガスカルでは柔道衣や畳等の環境面においては不十分であるが，熱心な柔道家が多く，柔道が愛され，必要とされているということが実感出来た。今後のマダガスカルは，熱心で，柔道の教育性を最も理解していたタマタブ道場の発展がマダガスカル柔道発展の鍵となるのではないだろうか。

今後日本は柔道発祥の地として誇りを持ち，積極的に国際交流に励むべきである。またその際，柔道の競技性だけを強調するのではなく，柔道の教育性を伝えていかなければならない。そして日本人の柔道家は恵まれた環境で柔道が出来ることを感謝し，不十分な環境で柔道をしている人たちのことを決して忘れてはならない。これから日本人自身も柔道の教育性をさらに見直し，そして教

育性を重視した真の柔道を伝えていくべきである。それが真の柔道国際化である。

## 12. 参考文献

- 1) 杉山重利編著 (2002) 武道論十五講．不昧堂出版，p.66.
- 2) 講道館 (2007) 月刊柔道11月号：p.57.
- 3) World Atlas, <http://www.sitesatlas.com/Atlas/PhysAtlas/>.
- 4) 世界地図旅行とデザイン地図製作・ホームページ地図作成, <http://www.aquanotes.com/africa/madagascar.html>.
- 5) 地球の歩き方編集室 (2001) 地球の歩き方114マダガスカル・モーリシャス・セシエル・レユニオン・コモロ，ダイヤモンドビッグ社，pp.4-128.
- 6) 在マダガスカル日本国大使館 (2005) マダガスカル案内．
- 7) JICA 独立行政法人国際協力機構公式ホームページ「JICA について」, <http://www.jica.go.jp/vision/index.html>.
- 8) 外務省公式ホームページ「各国・地域情勢 (マダガスカル共和国)」, <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/madagascar/index.html>.

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり，甲斐光先生には多大なるご協力をいただきました。甲斐光先生にはマダガスカルにて活動中も大変お世話になり，帰国後もこのような形でお世話していただき本当に感謝をしております。ありがとうございました。



写真1 首都アンタナナリボの町並み



写真2 移動手段の人力車「プスプス」



写真3 チンバザザ動物園のカメレオン



写真4 チンバザザ動物園のワオキツネザル



写真5 アンチラベでの稽古



写真6 チルヌマンディティでの稽古①



写真7 チルヌマンディティでの稽古②



写真8 アンブヒチャマンジャカでの稽古①



写真9 アンブヒチャマンジャカでの稽古②



写真10 ナショナルチーム練習場

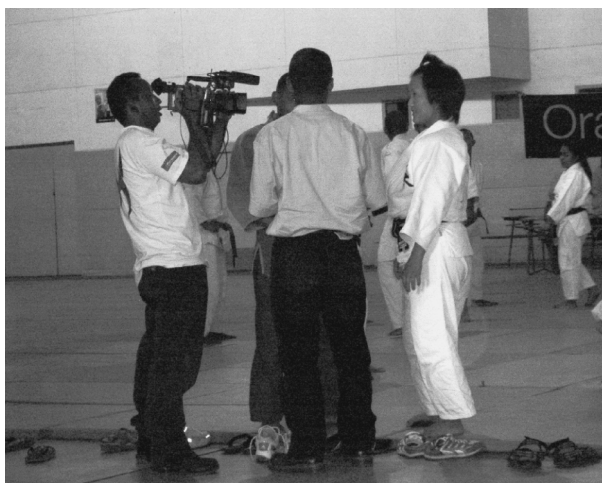


写真11 ナショナルチーム練習TV取材



写真12 ナショナルチームでの形稽古



写真13 アンパシャビットでの稽古



写真14 ウスカでの稽古



写真15 タマタブの道場



写真16 テーピングをせがまれる筆者



写真17 タマタブ道場の掃除の場面